



**IBARAKI TOYOPET
RACING TEAM**

2017 OKAYAMA チャレンジカップレース

**スポット参戦の OKAYAMA 2H レースで N1-86 クラス優勝！
平木兄弟と松永総合ディレクターが表彰台の中央で笑顔を見せた**



OKAYAMA International Circuit
岡山国際サーキット

OKAYAMA チャレンジカップレース第5戦
(2時間耐久/N1-86クラス)

予選・決勝：2017年9月24日

会場：岡山国際サーキット（岡山県美作市滝宮）

(<http://www.okayama-international-circuit.jp/>)

天候：晴れ時々曇り 2H

ドライバー：平木湧也／松永雅博／平木玲次

結果：予選クラス2番手／決勝クラス1位



GR 86/BRZ レース プロフェッショナルシリーズに参戦中の茨城トヨペトルレーシングは、岡山トヨペット/K-Tunes Racing とジョイントし、全面的なバックアップを受けて、岡山国際サーキットが舞台となる OKAYAMA チャレンジカップレース第5戦に、スポット参戦することになった。挑むのはN1-86クラスで、2H 耐久レースということもあり、レギュラーの平木湧也選手に加えて、総合ディレクターを務める松永雅博選手、そして平木玲次選手の3体制を敷くことに。

スポット参戦の趣旨としては、『ファンづくり』『各チームとのコミュニケーションの場づくり』の他平木兄弟のスキルアップのため。特に玲次選手はまったく初めてのツーリングカー、さらにHパターンということもあって、どれだけ対応できるか注目された。ちなみにN1-86とは、GR 86/BRZ レースのナンバーつき車両とは異なり、ナンバーなしの車両で、軽量化や車高ダウン、さらにパーツの自由な選択やエンジンのファインチューンも許される上に、このレースは特別規定でスリックタイヤの装着も可能。松永選手にとっては乗り慣れた車両ということもあって、その存在は平木兄弟のベンチマークにもなるわけだ。

しかし、その松永選手をして、走り始めは違和感を覚えたという。その理由は、以前はメディアムタイプであったタイヤが、前回のレースからハードタイプに改められていたからだ。「特にブレーキングがシビアになった」と松永選手。しかし、若手のスキルアップには、より良い条件となったとも言えるだろう。



ちなみにレースは予選、決勝を9月24日（日）に併せて行う1Day開催。土曜日までの練習走行で、たっぷり走り込んだ後、日曜日午前の予選に挑むことに。計測時間は30分間と長いものの、3名登録の茨城トヨペットレーシングは、全員が基準タイムをクリアしなければならない。そこで湧也選手、松永選手、玲次選手の順で効率よく走行することに。確実にクリアラップを湧也選手に取ってもらうため、計測開始から1分30秒ほどピットで待機。そこから「茨城トヨペット86」がコースイン。狙いは的中、しっかり視界が開けた状態での走行となった湧也選手はいきなり1分46秒407をマークしてトップに躍り出る。続けての攻撃ではタイムアップならず、さらに岡山トヨペット/K-Tunes Racingの「AREA86倉敷」を駆る、中山雄一選手が1分46秒339を出して、湧也選手のタイムを上回る。

続いて走行した松永選手は2週の計測で、1分47秒970が自己ベスト。最後の走行となった玲次選手は1周計測。他のふたりよりも厳しい条件とあって1分49秒038に留まるも、このレースウィーク自己最速タイムを出してきたことには、高い評価が与えられた。



「湧也が、雄一とほとんど変わらないタイムで走って、Nゼロとはいえシーズンを通じて86/BRZレースを戦っている効果は、確実にあったのじゃないかな。玲次も初めてのツーリングカーにもかかわらず、Hパターンミッションにしっかり対応できていた。僕はまあまあ（笑）今回は勝ちに行きますよ、僕は岡山とは相性がいいんでね」と松永選手。

「同じ86でも、いつものクルマとは違うことも多く、最初は慣れるところから始まって、いろいろ走り方を試してみました。コーナリングスピードが高いのに驚いたのですが、その特性をなんとかつかんで予選に挑みましたが、その中ではいいアタックができたので、自分としては満足しています。雄一さんには届きませんでした、もうちょっとです」と湧也選手が語れば、玲次選手も「1周計測で、前にも引かかってしまったのですが、レースウィークを通じると自己最速タイムも出せたので、決勝でもさらにプッシュして、タイムを縮めたいと思います」と、ふたりとも確実な手応えを感じていたようだ。

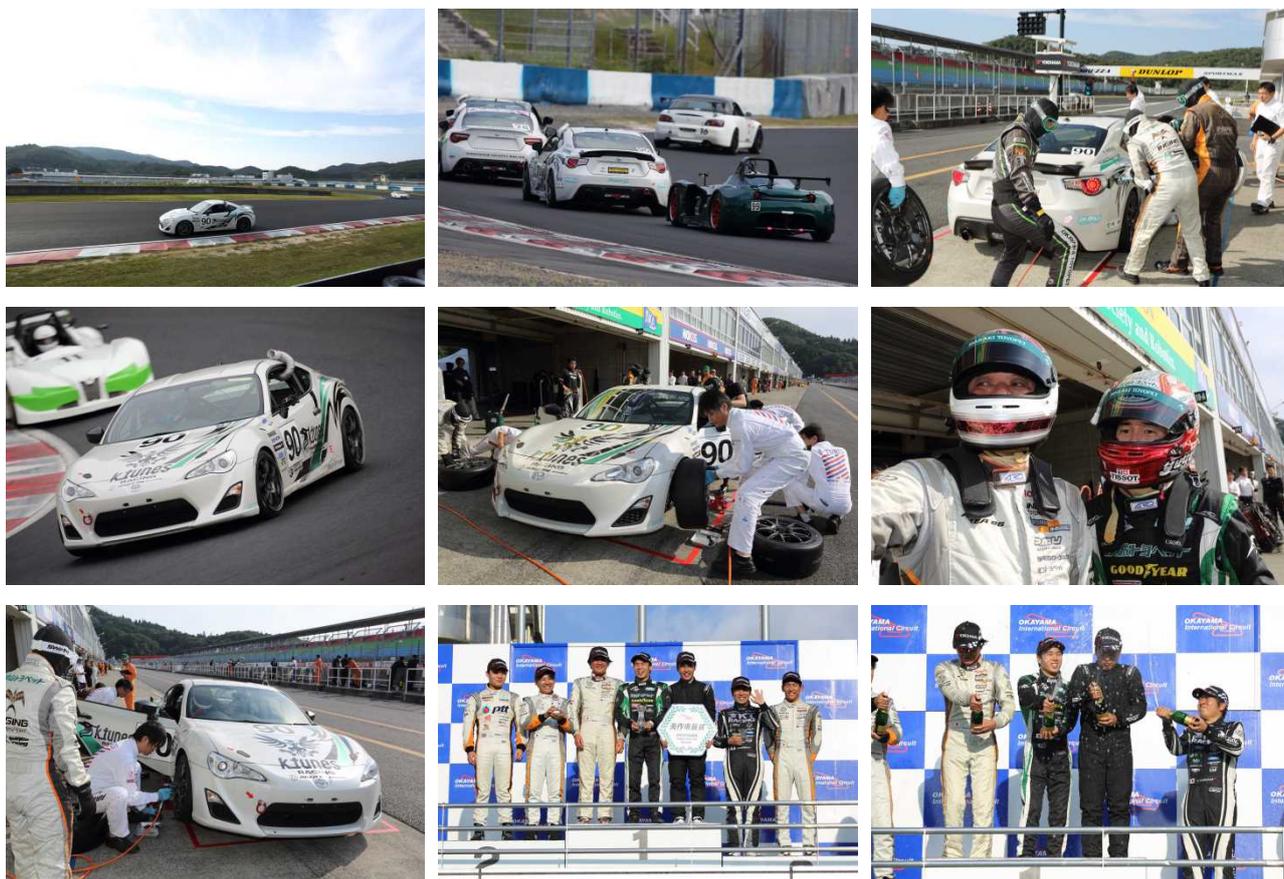
なお、クラスでは2番手だった「茨城トヨペット86」ながら、予選の終盤に他クラスの車両が最速タイムを記したこともあり、総合順位としては3番手から決勝レースに挑むこととなった。そして予選終了から、わずか3時間ほどのインターバルの後、決勝レースのスタート進行が開始。スタートを担当するのは湧也選手で、続いて松永選手、玲次選手という順で走行することに。13時5分にフォーメーションラップが始まり、セーフティカーによる1周の先導の後、グリーンシグナルの点灯でレース開始が伝えられる。



1コーナーにはポジションキープで飛び込んだ湧也選手ながら、すぐに迫ってきたのが「HTP. Maple 86」の新田守男選手と、予選ではN1-86勢の後塵を拝していたVITA勢。軽量ボディを武器に、さっそくオープニングラップのうちに湧也選手に襲いかかり、総合順位こそ落としてしまうも、クラス2番手はしっ

かりキープする。そのまま大きく遅れを取らず、新田選手に続いていた湧也選手。ラップタイムも1分49秒台の前半から48秒台の後半で、コンスタントに周回を重ねていく。

そして予定どおり40分を経過した、22周目に松永選手とバトンタッチ。ピットタイミングの違いから、いったんは3番手に交代した松永選手ながら、やがて2番手に返り咲き、注目されたのはまだピットに入っていない「HTP. Maple 86」との位置関係。ところが、まもなく折り返しの1時間を過ぎようというタイミングで、その「HTP. Maple 86」がガス欠でストップ！これで30周目から「茨城トヨペット86」はトップに浮上することとなった。そして、残り50分間、3人の中で最も長いステイントを、Hパターン、ツーリングカー初参戦となる玲次選手が担当することとなる。



やはりピットタイミングの違いによって、3番手にはいったん退いた玲次選手だったが、ライバルもピットに入ると、トップ返り咲きに成功。だが、その背後には周回遅れとはいえ「KTMS 86」の谷口信輝選手の姿が。仮に抜かれても順位はそのままながら、追われるプレッシャーも味わうこととなる。だが、そのことが玲次選手の集中力を高めることに。当初、1分51秒台だったラップタイムが周を追うごと短縮されて、やがて50秒台のコンスタントはもちろんのこと、49秒317を記すまでに。後方からは、さらに同一周回の「P. MU RACING CLUB 86」のナニン・インドラーパユーン選手も迫っていたから、49秒台への突入がなければ、きっと逆転を許してしまっていたことだろう。

25秒ほどあった差は、7秒3ほどにまで縮められたとはいえ、玲次選手は逃げ切りに成功。その結果、「茨城トヨペット86」が嬉しいクラス優勝を果たすこととなった。今回の得難い経験を、シーズンを通じて戦うレースに平木兄弟が活かしてくれることを期待したい。なお、湧也選手にとって、さっそく次のレース、GR 86/BRZ レース第8戦が、1週間後の9月30日（土）、10月1日（日）にスポーツランドSUGOで行われる。一皮向けた湧也選手の激走にぜひご注目あれ。

そして、このような貴重な機会を与えてくれた、岡山トヨペット/K-Tunes Racing に感謝の念は絶えない。



平木湧也選手のコメント



「今季初優勝です！このような機会を与えてくれた岡山トヨペットさんにはとても感謝していますし、すごく勉強になりました。新田選手のペースは速かったので、着いていくことに専念しましたが、その状況の中でコンスタントにタイムは残せていたので、2番手のまま松永選手につなげたのが、今回の結果に結びついたんだと思います。予選も満足のタイムが出ましたし、この経験を絶対、今後のレースに活かしていくつもりです」

松永雅博選手のコメント



「僕は楽しめたし、ストレス発散になったというか（笑）。予選も含め、湧也は86/BRZレースをシーズン通じてやっているのが効いたというか、タイム的にも合格。残りのレースが非常に楽しみです。玲次は走り始めこそ今イチだったけど、走るごとにタイムを上げていって、決勝では49秒台にまで入れて。あの感じでもう一回、予選をやったら確実に48秒台には入るでしょうから、すごく伸びましたよね。ツーリングカーも初めてならば、Hパターンも初めてなのに、思った以上に上達したから、これは大したもの。むしろ湧也より器用かもしれません。あんまり迫力は感じなかったけど、今後の玲次は期待ですよ」

平木玲次選手のコメント



「今週初めてツーリングカーに乗って、最初のうちはうまく順応できず、苦戦していたのですが、チームの皆さんやいろんな方に支えられて、なんとか優勝することができました。初めての経験だったのですが、すごく勉強になったので、次に活かしていきたいと思います。今回、全面的にバックアップいただいた岡山トヨペット/K-Tunes Racingの皆さんに感謝しています！」